

「自己点検・評価」から 認証評価への道のり

岩手大学理事・副学長
大野 眞男



1

岩手大学の教育組織

- 4学部
人文社会科学部・教育学部・工学部
・農学部
- 5研究科
人文社会科学研究科・教育学研究科
・工学研究科・農学研究科
・連合農学研究科

2



岩手大学の規模

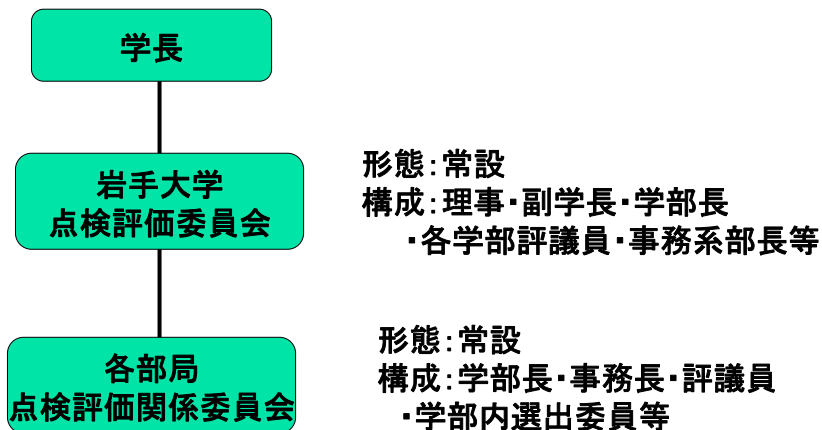
- 学部学生 5,313名
- 大学院学生 939名
- 教職員数 810名
- 校地面積
ワンキャンパス 約43万平方メートル
(附属学校・農場・牧場・演習林を除く)



岩手大学の特徴

- 教育・研究 + 社会貢献
- 大学教育総合センター
入試部門、全学共通教育企画・実施部門、教育
評価・改善部門、学生生活支援部門・就職支援
部門等
- 地域連携推進センター
企画部門、リエゾン部門、知的財産移転部門、
機器活用部門、生涯学習部門、地域司法部門

従前の自己点検・評価体制 (H17年5月:意向調査回答時)



5

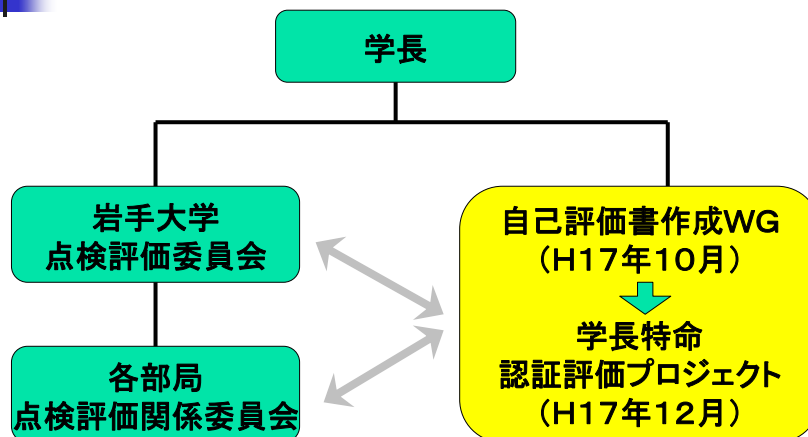
従前の自己点検・評価活動

- 各学部研究科単位の定期的な自己点検・評価報告書の作成
- 大学評価・学位授与機構の試行評価(H14)
全学テーマ別評価(「教育サービス面における社会貢献」「教養教育」「研究活動面における社会との連携及び協力」「国際的な連携及び交流活動」)
分野別研究評価(「農学系」)

6

認証評価に向けた体制

(H17年10月: 認証評価申請時)



学長特命認証評価プロジェクト

- 形態: 臨時(企画広報課管轄)
- 構成: 担当理事(地域連携)
 - ・兼務教員(4学部及び大学教育センター)
 - ・企画広報課長・財務課長 ……計8名
- 役割: 資料・データ集約及び自己評価書作成等、認証評価に関する一切の業務

自己評価書作成の検討経過

- 第1回(H17.10.12)～第2回(H17.11.18)
自己評価書素案の作成
- 第3回(H17.12.19)～第39回(H18.6.19)
自己評価書素案の内容補完等
- 自己評価書の提出(H18.6.30)
- 第40回(H18.7.12)～第47回(H19.1.23)
自己評価書提出後のチェック、質問事項、訪問
調査への対応等

自己評価書作成で留意した点(1)

- ①認証評価に関する情報収集
説明会・担当者研修会への積極参加
先行大学の聞き取り調査
- ②スケジュール管理
素案～第三次案 →最終案
各段階での関係委員会での審議

自己評価書作成で留意した点(2)

③文字数の制約

指定字数の5倍を超えた素案段階

図表化・挿入資料化等の工夫

④根拠資料の確保

膨大な資料の収集・管理

従来資料化されていない事業の資料化

→基準ごとの自己評価チェックシート

11

自己評価書作成で留意した点(3)

⑤全学的視点の確立

PJメンバーによる基準ごとの担当体制

「大学全体→学部・研究科」という記述原理

⑥各基準間の関係

各基準分担者間の文体の統一

記述内容の整合性

各基準間の記載量の調整

12

自己評価書作成で留意した点(4)

⑦大学の個性の反映

「大学の特徴」「目的」欄の厳選

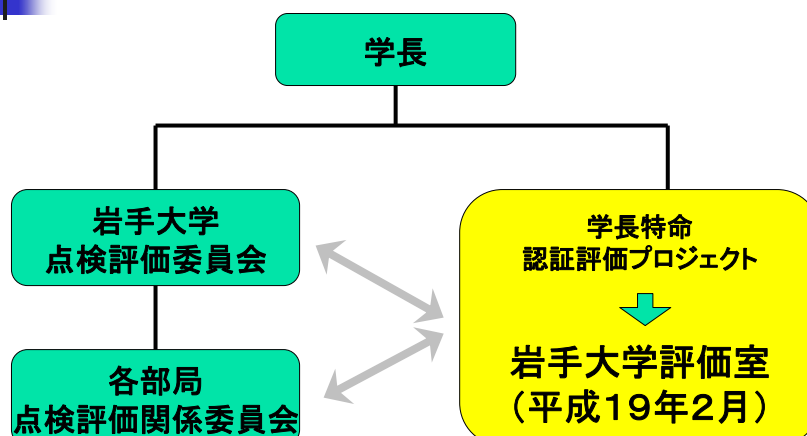
個性の反映としての選択的評価事項A・B

⑧PJメンバー等、作業担当者の

士気の維持

13

恒常的評価体制としての 「評価室」への移行



14

岩手大学評価室

- 形態： 常設(企画調査課管轄)
- 構成： 室長(評価担当理事)・評価室専任教員
 - ・兼務教員(4学部及び大学教育総合センター)
 - ・部長(事務系4部)・・・計11名
- 役割： ①認証評価結果に関する審議
 - ②2年ごとの全学自己評価の実施
 - ③法人評価への対応(年度評価・中期目標期間評価・次期中期目標・計画案等)

15

認証評価を通して得たもの

- 学部・研究科を超えて、一元的に大学全体を把握できるようになった。
- 評価担当の教職員集団が醸成され、恒常的評価体制が確立された。
- 定期的な評価を通じて教育・研究の改善を図るシステムが確立した。
- 大学の特徴・個性を再確認する機会となった。

16



反省点

- 作業着手の遅れ

PJ(WG)の立ち上げが認証評価受審申請書提出後となってしまった。

- データベースの未構築

認証評価作業と大学情報データベース構築を日程的に摺り合わせることができず、非効率であった。

17



ご清聴いただき、
ありがとうございました。



18